

対称的な不等式の証明方法について

やなぎた いっお
柳田 五夫

§1. はじめに

ここでは、対称式の不等式を扱っている。3次の対称的な多項式の不等式の一部については、柳田[1]で扱ったが、ここでは、次数に関係なく多項式の不等式を主に扱うことを考え、証明が難しい不等式の証明に対して有効な、SMV-Theoremを使用する。

SMV-Theoremの補助定理に当たるものがお茶の水女子大で出題されている。

n 個の実数の組 $S = \{a_1, \dots, a_n\}$ を考える。 $S = S_0$ に対し、「最大元と最小元を、両者の平均でそれぞれ置きかえる」という操作を施したものを S_1 、 S_1 に対し同様の操作を行ったものを S_2 、以下同様に S_3, S_4, \dots と n 個の実数の組を決めていく。 S_k の各数は、 $k \rightarrow \infty$ のとき $\frac{a_1 + \dots + a_n}{n}$ に収束することを言え。

(1997 お茶の水大・理・後期)

[解答] $S = \{a_1, a_2, \dots, a_n\}$ について、

$$c = \frac{a_1 + a_2 + \dots + a_n}{n},$$

$\beta_j = a_j - c$ ($j = 1, 2, \dots, n$) とおき、

$T = \{\beta_1, \beta_2, \dots, \beta_n\}$ に対して操作を行い、 T_k の各数は $k \rightarrow \infty$ のとき $\frac{\beta_1 + \beta_2 + \dots + \beta_n}{n}$ に収束することを示せばよい。ところで

$\beta_1 + \beta_2 + \dots + \beta_n = a_1 + a_2 + \dots + a_n - nc = 0$ であるから

$a_1 + a_2 + \dots + a_n = 0$ である $S = \{a_1, a_2, \dots, a_n\}$ について、 S_k の各数は、 $k \rightarrow \infty$ のとき 0 に収束することを示せばよい。このとき、 S_k を

$S_k = \{a_{k,1}, a_{k,2}, \dots, a_{k,n}\}$, $a_{k,1} \geq a_{k,2} \geq \dots \geq a_{k,n}$ としても一般性を失わない。

$$S_{k+1} = \{a_{k+1,1}, a_{k+1,2}, \dots, a_{k+1,n}\}$$

は

$$S_{k+1} = \left\{ \frac{a_{k,1} + a_{k,n}}{2}, a_{k,2}, \dots, a_{k,n-1}, \frac{a_{k,1} + a_{k,n}}{2} \right\}$$

で

$$\begin{aligned} & a_{k+1,1} + a_{k+1,2} + \dots + a_{k+1,n} \\ &= \frac{a_{k,1} + a_{k,n}}{2} + a_{k,2} + \dots + a_{k,n-1} + \frac{a_{k,1} + a_{k,n}}{2} \\ &= a_{k,1} + a_{k,2} + \dots + a_{k,n} \end{aligned}$$

が成り立つから、 S_i ($i = 0, 1, 2, \dots, n$) の要素の和は 0 である。

$\lim_{k \rightarrow \infty} a_{k,1} = 0, \lim_{k \rightarrow \infty} a_{k,n} = 0$ が示せれば、

$a_{k,1} \geq a_{k,2} \geq \dots \geq a_{k,n}$ であるから

$$\lim_{k \rightarrow \infty} a_{k,j} = 0 \quad (j = 1, 2, \dots, n)$$

がいえることになる。したがって、

$$\lim_{k \rightarrow \infty} a_{k,1} = 0, \lim_{k \rightarrow \infty} a_{k,n} = 0$$

を示す。

わかりやすいように、 S_k の最大数を $M_k (= a_{k,1})$ 、最小数を $m_k (= a_{k,n})$ とおくと

$$0 = a_{k,1} + a_{k,2} + \dots + a_{k,n} \geq nm_k$$

$$0 = a_{k,1} + a_{k,2} + \dots + a_{k,n} \leq nM_k$$

から

$$m_k \leq 0 \leq M_k$$

また、操作の定義により

$$m_{k+1} = \min \left(a_{k,n-1}, \frac{m_k + M_k}{2} \right)$$

$$\geq \min \left(a_{k,n}, \frac{m_k + M_k}{2} \right)$$

$$= \min \left(m_k, \frac{m_k + M_k}{2} \right)$$

$$= m_k$$

$$M_{k+1} = \max \left(a_{k,2}, \frac{m_k + M_k}{2} \right)$$

$$\leq \max \left(a_{k,1}, \frac{m_k + M_k}{2} \right)$$

$$= \max \left(M_k, \frac{m_k + M_k}{2} \right)$$

$$= M_k$$

であるから

$$m_k \leq m_{k+1}, M_{k+1} \leq M_k$$

が成り立ち、 $\{m_k\}$ は非減少列 (広義の増加列)、 $\{M_k\}$ は非増加列 (広義の減少列) となる。

$m_k \leq 0$ より

$$\frac{m_k + M_k}{2} \leq \frac{M_k}{2}$$

が成り立つから、 S_k から 1 回の操作を行うと最大数の 1 つは $\frac{M_k}{2}$ 以下となる。

S_k の要素の中で $\frac{M_k}{2}$ より大きいものがあるとき、操作 1 回によってその個数は 1 個ずつ減少する。したがって、 S_k の要素の中で $\frac{M_k}{2}$ より大きいものが l 個あるとき、 S_k について操作を l 回行えば S_{k+l} の要素はすべて $\frac{M_k}{2}$ 以下となるから

$$M_{k+l} \leq \frac{M_k}{2}$$

が成り立つ。

$l \leq n$ と $\{M_k\}$ が非増加列であることより

$M_{k+n} \leq M_{k+l}$ となるから

$$M_{k+n} \leq \frac{M_k}{2} \quad \dots\dots \textcircled{1}$$

が成り立つ。

①で $k=0$ とおくと $M_n \leq \frac{M_0}{2}$

①で $k=n$ とおくと $M_{2n} \leq \frac{M_n}{2} \leq \frac{M_0}{2^2}$

以下帰納的に

$$M_{in} \leq \frac{M_0}{2^i} \quad (i=0, 1, 2, \dots)$$

が成り立ち、 $0 \leq M_{in}$ であるから

$$0 \leq M_{in} \leq \frac{M_0}{2^i} \quad (i=0, 1, 2, \dots)$$

$\lim_{i \rightarrow \infty} \frac{M_0}{2^i} = 0$ であるから、はさみうちの原理により

$$\lim_{i \rightarrow \infty} M_{in} = 0$$

$k > 0$ のとき、 k を n で割ったときの商を i 、余りを r とすると

$$k = ni + r, \quad 0 \leq r < n$$

から、 $ni \leq k < (i+1)n$ が成り立ち、 $\{M_j\}$ は非増加列であるから

$$M_{in} \geq M_k \geq M_{(i+1)n}$$

$k \rightarrow \infty$ のとき、 $i \rightarrow \infty$ で、 $\lim_{i \rightarrow \infty} M_{in} = 0$ 、

$\lim_{i \rightarrow \infty} M_{(i+1)n} = 0$ であるから、はさみうちの原理により

$$\lim_{k \rightarrow \infty} M_k = 0 \quad \text{すなわち} \quad \lim_{k \rightarrow \infty} \alpha_{k,1} = 0$$

次に、 $\lim_{k \rightarrow \infty} \alpha_{k,n} = 0$ を示す。

$\alpha_1 + \alpha_2 + \dots + \alpha_n = 0$ である

$S = \{\alpha_1, \alpha_2, \dots, \alpha_n\}$ について

$-\alpha_n - \alpha_{n-1} - \dots - \alpha_1 = 0$ であるから

$S' = \{-\alpha_n, -\alpha_{n-1}, \dots, -\alpha_1\}$ を考え、

$S_k = \{\alpha_{k,1}, \alpha_{k,2}, \dots, \alpha_{k,n}\}$ 、

$\alpha_{k,1} \geq \alpha_{k,2} \geq \dots \geq \alpha_{k,n}$ のかわりに

$S'_k = \{-\alpha_{k,n}, -\alpha_{k,n-1}, \dots, -\alpha_{k,1}\}$ 、

$-\alpha_{k,n} \geq -\alpha_{k,n-1} \geq \dots \geq -\alpha_{k,1}$ を考えることにより

$$\lim_{k \rightarrow \infty} M'_k = \lim_{k \rightarrow \infty} (-\alpha_{k,n}) = 0$$

すなわち

$$\lim_{k \rightarrow \infty} \alpha_{k,n} = 0$$

を得る。 ■

§2. SMV-Theorem

(a_1, a_2, \dots, a_n) を任意の実数列とする。この実数列に対して、次の変換 Δ を行う。

1. $a_i = \min(a_1, a_2, \dots, a_n)$ 、

$a_j = \max(a_1, a_2, \dots, a_n)$ を満たす $i, j \in \{1, 2, \dots, n\}$ を選ぶ。

2. a_i と a_j を $\frac{a_i + a_j}{2}$ で置き換える。

最初の数列を $(a_1^1, a_2^1, \dots, a_n^1)$

$(= (a_1, a_2, \dots, a_n))$ と表し、変換 Δ を行った後の数列を $(a_1^2, a_2^2, \dots, a_n^2)$ と表すことにする。同様にして、数列 $(a_1^k, a_2^k, \dots, a_n^k)$ に変換 Δ を行った後の数列を $(a_1^{k+1}, a_2^{k+1}, \dots, a_n^{k+1})$ と表すことにする。

補助定理 (General mixing variables lemma)

(a_1, a_2, \dots, a_n) を任意の実数列とする。この実数列に対して、変換 Δ を k 回行った数列を $(a_1^{k+1}, a_2^{k+1}, \dots, a_n^{k+1})$ とすると、各 i ($1 \leq i \leq n$) に対して

$$\lim_{k \rightarrow \infty} a_i^k = a, \quad a = \frac{a_1 + a_2 + \dots + a_n}{n}$$

が成立する。

証明については、お茶の水女子大の問題の解答参照。

定理 Stronger mixing variables-S.M.V. theorem (SMV Theorem)

(a_1, a_2, \dots, a_n) を任意の実数列とする。この実数列に対して、変換 Δ を k 回行った数列を $(a_1^{k+1}, a_2^{k+1}, \dots, a_n^{k+1})$ とする。

$f: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$ は連続関数で、 a_1, a_2, \dots, a_n に関する対称式であるとする。このとき

$f(a_1, a_2, \dots, a_n) \geq f(a_1^2, a_2^2, \dots, a_n^2)$ が成り立ち、 $\{f(a_1^k, a_2^k, \dots, a_n^k)\}$ が $k \rightarrow \infty$ のとき収束するならば

$$f(a_1, a_2, \dots, a_n) \geq f(a, a, \dots, a),$$

$$a = \frac{a_1 + a_2 + \dots + a_n}{n}$$

が成立する。

補助定理から $\lim_{k \rightarrow \infty} a_i^k = a$ で、仮定から

$$f(a_1, a_2, \dots, a_n) \geq f(a_1^k, a_2^k, \dots, a_n^k)$$

が成り立ち、 $\{f(a_1^k, a_2^k, \dots, a_n^k)\}$ が $k \rightarrow \infty$ のとき収束することから

$$f(a_1, a_2, \dots, a_n) \geq f(a, a, \dots, a)$$

が得られる。

(a_1, a_2, \dots, a_n) を正の実数列とすると、変換 Δ として相加平均 $\frac{a+b}{2}$ のかわりに相乗平均 \sqrt{ab} を使うことができる。これは、 $b_i = \log a_i$ として、 (b_1, b_2, \dots, b_n) に補助定理を適用すればよい。このとき、 $a = \frac{a_1 + a_2 + \dots + a_n}{n}$ は $a = \sqrt[n]{a_1 a_2 \dots a_n}$ にかわる。

§3. 練習問題

例題 1 $x_i \geq 1$ ($i=1, 2, \dots, n$) のとき

$$n + (x_1 + x_2 + \dots + x_n)$$

$$\geq \sqrt[n]{x_1 x_2 \dots x_n} \left(n + \frac{1}{x_1} + \frac{1}{x_2} + \dots + \frac{1}{x_n} \right)$$

(大関[3]P.90 例題 10)

[解答] 一般性を失うことなく

$1 \leq x_1 \leq x_2 \leq \dots \leq x_n$ と仮定できる。

$$f(x_1, x_2, \dots, x_n)$$

$$= n + (x_1 + x_2 + \dots + x_n)$$

$$- \sqrt[n]{x_1 x_2 \dots x_n} \left(n + \frac{1}{x_1} + \frac{1}{x_2} + \dots + \frac{1}{x_n} \right)$$

とおくと

$$f(x_1, x_2, \dots, x_n)$$

$$- f(\sqrt{x_1 x_n}, x_2, \dots, x_{n-1}, \sqrt{x_1 x_n})$$

$$= x_1 + x_n - 2\sqrt{x_1 x_n}$$

$$- \sqrt[n]{x_1 x_2 \dots x_n} \left(\frac{1}{x_1} + \frac{1}{x_n} - \frac{2}{\sqrt{x_1 x_n}} \right)$$

$$= (\sqrt{x_1} - \sqrt{x_n})^2 - \sqrt[n]{x_1 x_2 \dots x_n} \left[\frac{(\sqrt{x_1} - \sqrt{x_n})^2}{x_1 x_n} \right]$$

$$= (\sqrt{x_1} - \sqrt{x_n})^2 \left(1 - \frac{\sqrt[n]{x_1 x_2 \dots x_n}}{x_1 x_n} \right)$$

$1 \leq x_1 \leq x_2 \leq \dots \leq x_n$ より

$x_n \geq \sqrt[n]{x_1 x_2 \dots x_n}$ が成り立つから

$$x_1 x_n \geq x_n \geq \sqrt[n]{x_1 x_2 \dots x_n}$$

したがって

$$f(x_1, x_2, \dots, x_n) - f(\sqrt{x_1 x_n}, x_2, \dots, \sqrt{x_1 x_n}) \geq 0$$

SMV-Theorem より、 $G = \sqrt[n]{x_1 x_2 \dots x_n}$ とおくと

$$f(x_1, x_2, \dots, x_n) \geq f(G, G, \dots, G)$$

が成り立つ。

$$f(G, G, \dots, G) = n + nG - G \left(n + \frac{n}{G} \right) = 0$$

であるから

$$f(x_1, x_2, \dots, x_n) \geq 0$$

例題 1 に関連する問題を大学入試問題から探してみた。

類題 1 次の問いに答えよ。

(1) $a \geq 1, b \geq 1$ のとき、次の不等式が成立することを示せ。

$$\left(a^2 - \frac{1}{a^2} \right) + \left(b^2 - \frac{1}{b^2} \right) \geq 2 \left(ab - \frac{1}{ab} \right)$$

(2) $a \geq 1, b \geq 1, c \geq 1$ のとき、次の不等式が成立することを示せ。

$$\left(a^3 - \frac{1}{a^3} \right) + \left(b^3 - \frac{1}{b^3} \right) + \left(c^3 - \frac{1}{c^3} \right)$$

$$\geq 3 \left(abc - \frac{1}{abc} \right)$$

(2007 早稲田大・教育)

類題 1 は次のように一般化できる。

類題 2 $x_1 \geq 1, x_2 \geq 1, \dots, x_n \geq 1$ のとき、次の不等式が成り立つ。

$$\frac{x_1^n + x_2^n + \dots + x_n^n}{n} - x_1 x_2 \dots x_n$$

$$\geq \left(\frac{\frac{1}{x_1^n} + \frac{1}{x_2^n} + \dots + \frac{1}{x_n^n}}{n} - \frac{1}{x_1 x_2 \dots x_n} \right)$$

類題 1(2)から $a \geq 1, b \geq 1, c \geq 1$ のとき, 不等式

$$\frac{a^3+b^3+c^3}{3}-abc \geq \left(\frac{\frac{1}{a^3}+\frac{1}{b^3}+\frac{1}{c^3}}{3}-\frac{1}{abc} \right)$$

が成り立つが $a \geq 1, b \geq 1, c \geq 1$ のときには, 右辺の条件を厳しくした不等式

$$\frac{a^3+b^3+c^3}{3}-abc \geq \left(\frac{\frac{1}{a^3}+\frac{1}{b^3}+\frac{1}{c^3}}{3}-\frac{1}{abc} \right) abc$$

の証明問題が 2003 年に東京慈恵会医大で出題されている。

この不等式は次のように一般化される。

類題 3 $x_1 \geq 1, x_2 \geq 1, \dots, x_n \geq 1$ のとき, 次の不等式が成り立つ。

$$\frac{x_1^n+x_2^n+\dots+x_n^n}{n}-x_1x_2\dots x_n \geq \left(\frac{\frac{1}{x_1^n}+\frac{1}{x_2^n}+\dots+\frac{1}{x_n^n}}{n}-\frac{1}{x_1x_2\dots x_n} \right) x_1x_2\dots x_n$$

類題 3 の不等式を変形したものが例題 1 である。

例題 2 a, b, c, d は非負の実数で, $a+b+c+d=4$ を満たすとき, 次の不等式が成り立つことを証明せよ。

$$3(a^2+b^2+c^2+d^2)+4abcd \geq 16$$

[解答] 一般性を失うことなく $0 \leq a \leq b \leq c \leq d$ と仮定できる。

$f(a, b, c, d) = 3(a^2+b^2+c^2+d^2)+4abcd-16$ とおくと

$$\begin{aligned} & f(a, b, c, d) - f\left(a, \frac{b+d}{2}, c, \frac{b+d}{2}\right) \\ &= 3\left\{b^2+d^2-2\left(\frac{b+d}{2}\right)^2\right\} + 4ac\left\{bd-\left(\frac{b+d}{2}\right)^2\right\} \\ &= \frac{3(b-d)^2}{2} - ac(b-d)^2 \\ &= (b-d)^2\left(\frac{3}{2}-ac\right) \end{aligned}$$

と変形できるから, $\frac{3}{2}-ac > 0$ を示す。

$a+c \leq b+d, (a+c)+(b+d)=4$ より $a+c \leq 2$ が成り立つ。

$$2 \geq a+c \geq 2\sqrt{ac} \text{ より } ac \leq 1 < \frac{3}{2}$$

よって $f(a, b, c, d) \geq f\left(a, \frac{b+d}{2}, c, \frac{b+d}{2}\right)$

$f(a, b, c, d)$ は b, c, d に関する対称式であるから, SMV-Theorem より

$$f(a, b, c, d) \geq f(a, t, t, t), t = \frac{b+c+d}{3}$$

が成り立つ。

したがって, $0 \leq a \leq 1 \leq t \leq \frac{4}{3}, a+3t=4$ のとき,

$f(a, t, t, t) \geq 0$ を示せばよい。

$$f(a, t, t, t) \geq 0$$

$$\iff 3(a^2+3t^2)+4at^3 \geq 16$$

$$\iff 3(4-3t)^2+9t^2+4(4-3t)t^3 \geq 16$$

$$\iff -12t^4+16t^3+36t^2-72t+32 \geq 0$$

$$\iff 4(t-1)^2(t+2)(4-3t) \geq 0$$

最後の不等式は明らかに成り立つ。 ■

例題 3 (Balkan Mathematical Olympiad 2012)

x, y, z が正の実数のとき, 次の不等式が成り立つことを証明せよ。

$$\begin{aligned} & (x+y)\sqrt{(z+x)(z+y)} \\ & + (y+z)\sqrt{(x+y)(x+z)} \\ & + (z+x)\sqrt{(y+z)(y+x)} \\ & \geq 4(xy+yz+zx) \end{aligned}$$

[解答] $a=\sqrt{y+z}, b=\sqrt{z+x}, c=\sqrt{x+y}$ とおくと

$$x = \frac{-a^2+b^2+c^2}{2}, y = \frac{a^2-b^2+c^2}{2},$$

$$z = \frac{a^2+b^2-c^2}{2}$$

ただし

$a, b, c > 0, a^2+b^2 > c^2, b^2+c^2 > a^2, c^2+a^2 > b^2$ が成り立つが, ここでは $a^2+b^2 > c^2, b^2+c^2 > a^2, c^2+a^2 > b^2$ を除いて, $a, b, c > 0$ のとき, 不等式が成り立つことを示す。

このとき

$$\sum_{cyclic} (x+y)\sqrt{(z+x)(z+y)} = abc(a+b+c),$$

$$4(xy+yz+zx)$$

$$= (-a^2+b^2+c^2)(a^2-b^2+c^2)$$

$$+ (a^2-b^2+c^2)(a^2+b^2-c^2)$$

$$+ (a^2+b^2-c^2)(-a^2+b^2+c^2)$$

$$= 2(a^2b^2+b^2c^2+c^2a^2) - (a^4+b^4+c^4)$$

となるから

$$abc(a+b+c) \geq 2(a^2b^2+b^2c^2+c^2a^2) - (a^4+b^4+c^4)$$

すなわち

$$a^4 + b^4 + c^4 + abc(a+b+c) \geq 2a^2b^2c^2 \left(\frac{1}{a^2} + \frac{1}{b^2} + \frac{1}{c^2} \right)$$

を示せばよい。

一般性を失うことなく $0 < a \leq b \leq c$ と仮定できる。

$$f(a, b, c) = a^4 + b^4 + c^4 + abc(a+b+c) - 2a^2b^2c^2 \left(\frac{1}{a^2} + \frac{1}{b^2} + \frac{1}{c^2} \right)$$

とおくと

$$\begin{aligned} & f(a, b, c) - f(a, \sqrt{bc}, \sqrt{bc}) \\ &= b^4 + c^4 - 2b^2c^2 + abc(b+c-2\sqrt{bc}) \\ &\quad - 2a^2b^2c^2 \left(\frac{1}{b^2} + \frac{1}{c^2} - \frac{2}{bc} \right) \\ &= (b^2 - c^2)^2 + abc(\sqrt{b} - \sqrt{c})^2 - 2a^2(b-c)^2 \\ &= (b-c)^2 \{ (b+c)^2 - 2a^2 \} + abc(\sqrt{b} - \sqrt{c})^2 \\ &= (b-c)^2 \{ \underbrace{(b^2 - a^2) + (c^2 - a^2)}_{\geq 0} + 2bc \} \\ &\quad + abc(\sqrt{b} - \sqrt{c})^2 \geq 0 \end{aligned}$$

から

$$f(a, b, c) \geq f(a, \sqrt{bc}, \sqrt{bc})$$

が成り立つ。

よって、 $t = \sqrt{bc}$ とおき、 $0 < a \leq t$ のとき、 $f(a, t, t) \geq 0$ を示せばよい。

$$\begin{aligned} & f(a, t, t) \\ &= a^4 + 2t^4 + at^2(a+2t) - 2a^2t^4 \left(\frac{1}{a^2} + \frac{2}{t^2} \right) \\ &= 2at^3 - 3a^2t^2 + a^4 \\ &= a(t-a)^2(2t+a) \geq 0 \end{aligned}$$

■

《参考文献》

- [1] 柳田五夫, 3次の同次対称式 $P(a, b, c)$ の不等式について, 数研通信, No.80
- [2] P.K.Hung: The stronger mixing variables method, Mathematical Reflections 6 (2006)
- [3] 大関信雄・大関清太: 不等式への招待, 近代科学社

(元 栃木県立佐野高等学校)